

京都大学	博士（文学）	氏名	盧 旭
論文題目	『白氏文集』編集に関する研究		
<p data-bbox="209 434 456 468">（論文内容の要旨）</p> <p data-bbox="193 486 1382 1021">文集の編集という行為は、中唐の時代（八～九世紀）に至って大きな画期を迎え、それ以降、文人たちの間に自ら詩文を整理し文集を作ろうとする熱意が高まった。しかし残念なことに、中唐期における自編別集の大半は散佚してしまい、その詳細を明らかにすることは難しい。例外として、『白氏文集』には中唐の代表的文人・白居易（七七二～八四六）の詩文が数多く保存されており、自編別集の実態を考察するために貴重な手がかりを提供している。ただし、宋代以降に流伝した刊本『白氏文集』は白居易手定本とかなり異なるとされ、そのテキストとしての質が否定されてきた。筆者は、そうした従来の見解は妥当でなく、実は刊本もまた『白氏文集』の原形をかなりの程度保っていると考える。本論文は、主として刊本に依拠しつつ、日本に伝わる旧鈔本と校本を参照して『白氏文集』の編次復元を試み、あわせて『白氏文集』というテキストに潜む文学観・編集理念を究明するものである。</p> <p data-bbox="225 1039 895 1072">本論文は序論、本篇六章、結論から構成される。</p> <p data-bbox="193 1090 1382 1274">序論では、『白氏文集』の諸本、編次復元、分類に関する先行研究を概観したうえで、現行の『白氏文集』も実はよく原形を保つこと、及び編集の視点からさらに検討の余地があることを確認した。次いで本論文全体の構成を説明し、論述対象となる『白氏文集』諸本について、その書誌情報や特徴などを紹介した。</p> <p data-bbox="193 1292 1382 1476">第一章「動態的な『白氏文集』」では、『白氏文集』編集の実態を解明するために、「動態的な『白氏文集』」という本論文の核心をなす視点を提起した。「動的」とは、すなわち白居易が生涯にわたり随時自分の作品を整理し、存命中に『白氏文集』の巻次、文字、作品数、作品配列が絶えず変動し続けたことを意味する。</p> <p data-bbox="193 1494 1382 1827">続いて、1465「唐故會王墓誌銘 並序」（四桁のアラビア数字は花房英樹『白氏文集の批判的研究』によって附した作品番号、以下同じ）、0596「長恨歌」の「廻頭下視人寰處」という一句の諸本における文字の異同、及び『白氏後集』の形成過程における作品配列の変化に基づき、この視点の妥当性を検証した。白居易の生前には『白氏文集』唯一の定本と言うべきものが存在しなかったため、作品配列の齟齬や諸本間の異同を対照する際、あるテキストが他者による改変であるとは簡単に判断できず、いずれのテキストも白居易本人の手に出る可能性があり得ることを示した。</p> <p data-bbox="193 1845 1382 2029">さらに、3024「題文集櫃」の「前後七十卷」という一句の理解とその詩の創作時期、3798「醉吟先生墓誌銘 並序」の作品真偽、白居易が晩年に寺院に奉納した文集の様態、『白氏長慶集』の収録下限などに関する従来の論争を回顧したうえで、「動態的な『白氏文集』」という視点によって旧説に対して修整補充を加えた。こうした</p>			

論争が生じたのは、まさしく白居易が生涯にわたり『白氏文集』を編集し続けたことが正確に理解されなかったためであろう。

第二章から第四章までは一つのまとまりであり、主として『白氏文集』、特に『前集』にあたる『白氏長慶集』の様態を通して、その背後にある白居易の文学観・編集理念を分析、検証した。

第二章「詩集十五巻から『白氏長慶集』の詩巻へ——白居易と元稹の編集理念の違い」は、『白氏長慶集』、特にその古体詩の分類に関する研究である。

長慶四年（八二四）に成立した『白氏長慶集』、及び『白氏長慶集』の中に保存される元和十年（八一五）成立の「詩集十五巻」の様態を分析し、1486「與元九書」に提起された四分類（諷諭・閑適・感傷・雜律）が詩集十五巻本のために設けられた基準であり、元和末年（～八二〇）の時点において四分類はすでに事実上崩壊していた、という結論を得た。ただし、『白氏長慶集』では依然として四分類を維持しているが、その原因は『長慶集』の編集者たる元稹（七七九～八三一）にある。

長慶末年（～八二四）に至るまで、元稹は詩を分類するという主張を掲げ続けたが、その一方で時間的な制約もあったため、既成の四分類をそのまま維持しようとした。また、元稹は非諷諭の五言古詩を細分しないため、白居易の江州時代以後の二巻分の五言古詩を、おおよその風格の違いによって「閑適」と「感傷」に分類した。その結果、分類が不自然な詩が存在し、後世の読者に『白氏長慶集』の分類が混乱しているという印象を与えることになった。このほか、白居易と比べると、元稹は整った数字にこだわりがあったようで、『白氏長慶集』の巻数や収録作品数を調整し、各巻内部の統一よりもむしろ詩文集全体の形式美を追求した。

第三章「『白氏長慶集』雜律詩の編次復元に関する再考」は、『白氏長慶集』雜律詩の巻の配列を復元する試みである。

『白氏長慶集』の雜律詩の各巻には、元来それぞれ百首が収録されていたはずである。しかし、現存刊本の巻頭内題に「凡一百首」と記されながら、その実際の収録数が百首に満たない巻も存在する。これは『白氏文集』の流伝過程に生じた齟齬であると解釈できよう。幸いなことに、日本には旧鈔本『白氏文集』に由来する選抄本、及び旧鈔本によって校語を書き入れた校本がいくつか伝存する。近年、陳翀氏は天海校本に基づき、『白氏長慶集』雜律詩の巻の復元を試みる論考を発表したが、しかし天海の校語を過信し、不合理な記述をそのまま復元作業に取り入れた箇所もあり、陳氏の結論に問題がないわけではない。筆者は陳氏の所説を踏まえたうえで、選抄本・校本資料、及び『白氏長慶集』雜律詩の巻の巻頭内題に記された収録数と該当作品の創作時期を参照して、『前集』＝『白氏長慶集』の雜律詩の編次を改めて考察した。

考察の結果、佚詩3760「歙州山行憶故山」を巻十三、3738「城西別元九」を巻十五、3757「聽琵琶勸殷協律酒」を巻十九、3739「陳家紫藤下贈周判官」を巻二十に復元し、1306「閑坐」1307「不睡」を巻十九から巻二十に移動すると、『白氏長慶集』雜律詩八巻のうち、巻十九が九十九首であるのを除き、他の巻はすべて百首になるこ

とが判明した。しかも巻十九は百首一卷の巻に挟まれており、もともとは百首であり、『白氏長慶集』律詩八巻は数量上、すべて整った形態であった可能性が高い。以上の結果により、第二章に述べた『白氏長慶集』が形式美を追求したテキストであるという仮説が裏付けられる。ただし、巻十八に併録される白行簡の詩「望郡南山」一首を加えて総数を百首とするなど、その形式美はいささか機械的なものでもあった。

このほか、3760「歙州山行憶故山」に関連して白居易の移動経路を考察した附論では、貞元十五年末、白居易が大運河を経由して南方から洛陽に赴いたことを推測した。

第四章「中唐における唱和集と自編別集の関係——白居易と元稹・劉禹錫を中心に」は、中唐後期における唱和集と自編別集の関係に関する研究である。

白居易・元稹・劉禹錫は、いずれも生前に別集と唱和集の両方を編集した。しかし、この三人における別集と唱和集の関係は一致しない。現行の三人の文集を緻密に分析することにより、元稹と劉禹錫が唱和集の詩を別集に収録しなかったのに対し、白居易は唱和集の詩を別集に再録したことを明らかにした。

唐代において、別集や唱和集を編集する主な目的は作品の保存にあり、作者が生前に文集を自編すれば、おのずと複数の文集を生み出すことになる。唱和集の詩の場合、元稹と劉禹錫のように、別集に収録しないのが一般的な作法であった。

これに対して、白居易の唱和詩は生前から非常に流行したため、別集と唱和集両者の機能分化をもたらした。つまり、白居易は別集を作品保存のために、唱和集を作品伝播のために、それぞれ使い分けたのである。また、彼は作品保存と偽作防止を目的として、唱和集の詩を別集に収録した。このような編集方法の内因として、詩人意識の覚醒を挙げることができよう。白居易は別集を己の分身と見なし、自らの文学の営みをすべて『白氏文集』に留めるべく、全集を編集しようと企図したのである。

文人たちが文集を自編した中唐期において、白居易の場合、別集と唱和集の両方を編集するという時代の共通性を持ちながら、その一方で、全集完成への執着という個性が際立っている。自分の全作品を『白氏文集』に保存しようとした白居易の編集意識と方法は、まさに宋代以後の読者のニーズに応えるものでもあった。その意味において、『白氏文集』は写本の時代に生まれながら、刊本が主流となる宋代以後の受容においても成功したと言える。

以上の第二章から第四章までは、『白氏文集』のいわばテキストの外側を考察して、その編集理念を探究した研究である。以下の第五章と第六章はテキストの内側から、『白氏後集』古体詩の分類に着目して白居易の詩体観を探究した研究である。

第五章「『白氏後集』における「格詩」」は、『後集』の「格詩」に関する研究である。

『白氏後集』には古体詩四巻半があるが、呼称が異なっても、各巻の区別は必ずしも明確でない。ここでは「格詩」の意味、外延、特徴を詳細に考察した。

「格詩」の「格」の意味については、従来、大別して二種類の意見がある。中唐当

時の用例、及び白居易自身の記述を分析すれば、陳寅恪を代表とする「格＝風格、格調」説が勝る。

次に「格詩」の外延については、清代以来、「齊梁体」説、「古体詩」説、「五言古詩」説という三つの説があり、近現代になると、「古体詩」説と「五言古詩」説を折衷した陳寅恪による「広狭二義」説も現れた。陳氏の説に対しては刊本の巻頭内題と一致しないという指摘もあるが、筆者は刊本『白氏文集』の目録を精査したうえで、やはり陳氏の「広狭二義」説を支持する。

「半格詩」に関しては、筆者も現在の学界の主流である「半分が格詩」という説に賛同する。ただし、巻六十九に七言古詩二首があるのはいささか理解に苦しむが、おそらく東林寺に文集を奉納する直前、白居易は急いでこの二首を補充したため、巻頭内題を修正するのが忘れられた可能性もあるだろう。

「格詩」の特徴について、まず声律の面では、詩集十五巻の「古調詩」と比較すると、「古調詩」よりも律詩化の程度が高い。ただし、仄韻詩の比率が高く、なお律詩との隔たりがある。また、「古調詩」内部にも差異がある。「諷諭古調詩」と「閑適古調詩」の声律の特徴が一致し、「感傷古調詩」とは違いがあるのに対し、「感傷古調詩」の声律の特徴はむしろ「格詩」と近い。「諷諭古調詩」と「閑適古調詩」を作る時、詩道の回復を意識する白居易は、より伝統的なスタイルの五言古詩を作ろうとした。他方、「感傷古調詩」と「格詩」を作る時には、リラックスした心理状態にあり、近体詩の声律規則の影響がより現れやすかったと考えられる。

内容の面では、「格詩」の具体的な作例を『前集』の「閑適詩」、「感傷詩」及び『後集』の律詩と比較すると、「格詩」には五言古詩に共通する説理性、士大夫としての矜持、古典的な語彙の多用などの特徴とともに、晩年の生活を楽しもうとする姿勢を確認することができる。

第五章で明らかにしたのは、「格詩」が古体詩を指すという当時の一般的用法に対して、白居易は「格詩」を五言古詩に限定したという点である。これは彼自身の創作実践によって詩体を定義したものにほかならない。また、「格詩」とは『前集』に見えない呼称であるが、『前集』の「閑適古調詩」と「感傷古調詩」から風格上の特徴の一部を継承して融合したものである。そこから『前集』と『後集』の繋がりを窺うことができる。

第六章「『白氏後集』における「歌行」「雑体」」は、『後集』の「歌行」と「雑体」に関する研究である。

『白氏文集』の用例を見れば、白居易にとっての「歌行」は七言古詩である。しかし、その逆の七言古詩すなわち「歌行」という認識はあてはまらない。白居易の七言古詩には「雑体」も含まれており、「雑体」とは、まとまりのない「歌行」以外の雑多な七言古詩を指す。

「歌行」と「雑体」との違いはまず詩題にある。先行研究では、歌行の多くに「歌詞的詩題」があると指摘されるが、筆者は新樂府をはじめとする詩作を詳細に検討し

た結果、詩の第一句或いは第一句（場合によって第二句や後の句）の一部分を詩題に取り入れることも「歌行」の特徴の重要な要素であることを明らかにした。

このほか、内容の違いも「歌行」か否かの重要な判断基準となる。白居易の「歌行」は伝統的な主題に沿い、詠物・叙事、抒情、及び両者融合の三類に分けられる。詠物・叙事歌行の作例は少ないが、「○○歌」や「○○行」と詩題が命名され、最も伝統的と言える。一方、抒情歌行においては、老衰の悲しみが極めて重要な主題となり、老衰に対する態度によって、「歌行」はほかの詩体と区別される。

具体的に比較すると、「格詩」は説理的で老衰を悲しまないのに対し、「歌行」は「格詩」よりも直情的で、老衰の悲しみを率直に表現する。また、「格詩」は官僚の立場、「歌行」は個人の立場に立つ傾向があり、それぞれ発想を異にする。

「歌行」と律詩を比較すると、「歌行」は老衰を悲しむが、老態に対する描写は少ない。白居易は律詩において自らの老態を描写し、老い衰えた自己ときちんと向き合おうとする。また、律詩は短小の詩型であるため、「格詩」や「歌行」のように説理や事物の比較には適さないと言える。

「雑体」については、唱和詩が多く含まれることを指摘できる。ここから、白居易とほかの詩人との詩体に対する認識の違いが見える。つまり、当時の一般の詩人と比べて、白居易はより明確な詩体観を持ち、同じ七言古詩の中でも「歌行」と非「歌行」を区別したのである。

詩題以外に、「雑体」の雑たるゆえんのもう一つの特徴は、ほかの詩体に見まがうような詩が存在するという点である。「歌行」に似る「雑体」と「歌行」を比較すれば、「歌行」に似る「雑体」の風格は「格詩」に偏り、「歌行」から離れて説理的である。一方、八句の律詩に似る「雑体」と八句の律詩を比較すれば、両者の内容は近いが、展開方式に相違が見られる。つまり、律詩では各聯がそれぞれ違う役割を担い、相互作用的に詩境を構築するのに対し、「雑体」のほうはしばしば単一方向に展開する。

第六章で明らかにしたように、白居易が七言古詩を「歌行」と「雑体」に区分した理由は、編集分類を通して、当時の曖昧な詩体を明確に定義づけようとしたことにある。後世の人々はそうした白居易の歌行観を完全に継承したわけではないが、『白氏文集』の「歌行」の様式は新楽府と歌行の定義確立に大きな影響を与えたのである。

(論文審査の結果の要旨)

中唐の白居易(字は楽天)の詩文集『白氏文集』に関する文献学的研究は、20世紀後半になって、花房英樹・平岡武夫・太田次男らの先達によりめざましい進展を遂げた。その最大の要因は、日本に多数現存する旧鈔本(唐鈔本を転写したテキスト)を利用したことにある。中国本土で通行した刊本系テキストが後人による恣意的な改変を経ているのに比べ、旧鈔本は唐代のもとの編成と良質の本文を保存しており、その資料価値はきわめて高い。現在の白居易研究は、日本・中国いずれの学界を問わず、旧鈔本の存在を無視しては成立し得ないといっても過言ではないだろう。

『白氏文集』編集の実態を解明しようとする本論文においても、もとより旧鈔本系テキストの価値は十分に認識され、実際の論証過程でも適宜参照される。しかし、論者は旧鈔本系と刊本系の両者を詳細に比較したうえで、前者が白居易による本文、後者が後代の改変とは簡単に判断できないとし、むしろ刊本(特に南宋・紹興本)もまた『白氏文集』の原形をかなりの程度留めているという立場をとる。白居易みずから「旧句 時時に改む」と詩に詠じたように、原『白氏文集』は彼が生涯にわたり増補改訂をくりかえした重層的なテキストであり、その本文や編次はたえず変化し続けたのである。論者はかかるテキストの流動性、不確定性を「動的な『白氏文集』」と称して本論文の考察の核心に据え、あわせて文集編集という行為に内包された白居易の編集理念や文学観を探究する。

以下、本論文の研究成果のうち、特筆すべき四つの論点について説明する。

(一) 『白氏長慶集』の編次復元

元和十年(815)に白居易みずから詩集十五巻を編集したが、その際に「元九に与うる書」にいう「諷諭・閑適・感傷・雑律」の四分類を採用したことはよく知られる。その後、長慶四年(824)、親友の元稹が白居易のために『白氏長慶集』五十巻を編集した。これが後に完成する『白氏文集』の『前集』にあたる。本論文の第二章・第三章では、それぞれ『白氏長慶集』の古体詩と雑律詩の巻について緻密な検討を加え、原形の推定を試みる。雑律詩八巻を例に挙げると、刊本系統の紹興本と那波本の巻頭内題によれば、元来は各巻百首ずつ収録されていたと思いが、実際の作品数とは若干の出入がある。論者は旧鈔本系のテキスト、および江戸初期の僧天海による校本などを参照し、各巻百首収録されたかたちを鮮やかに復元してみせた。

(二) 編者としての元稹の関与

従来、元稹が『白氏長慶集』の編集にどの程度関与したのか詳らかにされていなかったが、『白氏長慶集』に先立つ白居易自編の詩集十五巻と比較することによって、論者は以下の知見を導き出した。第一に、元和末年の時点で前述の四分類が事実上崩壊していたにもかかわらず、元稹は自身の編集理念にもとづき、これを維持しようとしたため、『白氏長慶集』の分類基準に少なからず混乱をきたした。第二に、元稹は整った数字に拘りがあり、巻数や収録作品数をそろえ、各巻の紙幅を均等にするなど、文集全体の形式美を追求したこと。このほか、詩集十五巻と『白氏長慶集』と

の間に「中間形態のテキスト」が存在していたという仮説についても、現存資料の制約があるとはいえ、手堅い実証により一定の説得力を有する。

（三）唱和集と自編別集の関係

白居易は元稹・劉禹錫との間にそれぞれ唱和集を作ったが、興味深いことに、元・劉の二人がそれら唱和集の詩を別集（個人別の詩文集）に収録しなかったのに対し、白居易はみずから積極的に別集に再録している。論者によれば、白居易にとって、唱和集は同時代における流行伝播を目的とするもの、別集は作品の永久保存と偽作防止を目的とするものであり、それぞれ機能を異にするという。先行研究ではこれまで亡佚した唱和集の復元に関心が集中してきたが、本論文は別集との関係に着目しつつ、唱和集の詩が再録された理由として、自身の文学的営為すべてを『白氏文集』に結集しようとする詩人意識の覚醒を挙げる。全集を志向する白居易の編集理念を浮き彫りにした好論といえよう。

（四）『白氏後集』における「格詩」

元稹の編になる『白氏長慶集』（『前集』）の後を継ぐのが『白氏後集』であり、そこではじめて白居易は「格詩」という分類名称を用いる。「格詩」の特徴について、論者はその声律の状況を丹念に調査して統計をとり、詩集十五巻の「古調詩」に比べて、「格詩」のほうが律詩化の程度が高いことを指摘する。ただし、同じ「古調詩」でも、「諷諭古調詩」と「閑適古調詩」が伝統的な五言古詩であるのに対し、「感傷古調詩」の声律はむしろ「格詩」に近い。「諷諭」や「閑適」のように兼濟・独善の志を述べた主題ほど古体詩の傾向が強く、その一方で、「感傷」や「格詩」の場合はリラックスした心理状態で詩を詠じたため、むしろ規則の厳しい近体詩を選択しがちであるという結論は、白居易の声律意識を考えるうえで示唆に富む。

このように評価すべき点の多い労作ではあるものの、なお改善の余地がないわけではない。たとえば、『白氏長慶集』を編集した元稹が各巻の紙幅を調整して形式美を求めたとする見解は魅力的であるが、中唐当時の卷子本や書帙といったテキストの物質的形態も考慮に入れるべきではないか。あるいは、「格詩」には内在的な思考から感情を喚起するパターンと外在的な事物・体験から感情を喚起するパターンの二つの展開方式があると述べるが、そこに表現される思考や感情の内実を掘り下げ、具体的な作品分析へと深化させる必要があるだろう。しかし、こうした課題は論者自身もすでに認識しており、今後の研鑽によって必ずや克服されるものと確信する。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2023年2月1日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。